
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究」（負債研）2019年度第1回研究会

日時：

開催日：6月30日（日） 13:00～18:00

場所：

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304 室

プログラム：

13:00～15:00 佐久間寛「【趣旨説明】負債の力を問いなおす」

15:15～17:45 全員「所信表明」

18:00～18:30 全員「打ち合わせ」

司会：箕曲在弘

参加者：19名

内容：

はじめに研究代表者の佐久間より本研究会についての趣旨説明があった。

リーマンショックから欧州債務危機にいたる金融不安を背景に、負債をめぐる議論が活性化するなかで、そもそも負債とは何かという問いが提起されてきた。D. グレーバーの『負債論』（2011年）は、膨大な民族誌的資料を駆使して、負債が単なる経済現象ではなく義務や負目といった社会的次元と関わることを論証し、現代金融資本のグローバルな運動が私的利益の追求のみならず「負債は返さねばならない」というモラルに下支えされていることを明らかにした。その功績は大きいですが、彼の議論には現代西欧を範型とした経済的負債と非西欧を範型とした社会的負債を過度に分断するという難点がある。

本研究には、各地のフィールドで別個に負債の問題に直面してきた人類学者・経済学者が参加する。その目的は、具体の場で生起する経済的負債と社会的負債との複雑なもつれあいに着目して、負債のダイナミズムを解明することにある。ときに人の生存さえ脅かす負債の力の解明は世界的課題といっても過言ではない。その組織的探求の試みである点に本研究の意義がある。

以上の研究方針をふまえて佐久間は最後に、自身のフィールド経験を事例として、「負債は返

さねばならない」のみならず「それを完済してもならない」というダブルバインドこそが重要なのではないかという問題提起をおこなった。

これにたいして参加者からは、報告者が注目した事例を好意的に評価する意見がある一方、地域や生業などによる差異を所与の前提とした比較研究からは事例の不毛な寄せ集め以上の成果は得られないのではないかという指摘や、西欧近代における負債の「重み」からの解放というプロジェクトを一概に退けることができるのかといった問題提起がなされた。

つづいて全参加者による所信表明が行われた。地域も生業も関心も異なる研究者が集まっているにもかかわらず、負債という現象の背後に、シェアリング、自律と自由、暴力と死といった問題系がもつれあっていることを伺わせる示唆的な発言が相次いだ。

第二回研究会を年度末に行い、発表者は箕曲、河野、酒井、佐川の4名とすることで合意した。

(文責 佐久間)